

令和元年度 全国学力・学習状況調査結果のお知らせ  
大月市内小中学校の状況について

大月市教育委員会

4月18日に「全国学力・学習状況調査」が実施されました。この調査は小学校6年生と中学校3年生の国語と算数・数学のそれぞれ基礎的な知識とその活用力を問う問題、そして初めて中学校の英語の基礎的な知識、活用力を問う問題及び学習状況が対象になりました。なお、昨年度までは、教科の基礎的な知識をはかるA問題と、その活用力を問うB問題の二つの問題がありました。しかし、A問題とB問題の成績には強い相関関係があり、活用の力を伸ばすにはまず知識の獲得を優先しなければならないとするだけでなく、活用の学習を通して知識が定着するという側面もありました。また、新学習指導要領の趣旨を踏まえた指導の改善と充実を図るためには、知識と活用を一体的に問う形が望ましいという判断もなされ、今年度からABの二つの問題が一つに統合されました。

大月市教育委員会ではその調査結果を分析しましたのでお知らせします。また市内各校では、自校の結果を分析し、指導方法の改善等を行っています。更に調査を受けた児童生徒とその保護者の皆様には、個々の良いところや課題点、努力点等を説明し、今後の学力向上に向けて家庭との連携を図るよう努めています。

1. 大月市の子どもたち（小学校6年生・中学校3年生）の学力・学習状況について

	市内小学校の平均正答率	市内中学校の平均正答率
国語	県を下回る	県とほぼ同等
算数 数学	県をやや下回る	県とほぼ同等
英語		県とほぼ同等

※ 「県平均とほぼ同等」という根拠 …… 文部科学省では、平均正答率との差±5%を微差とし、「±5%は、ほぼ同等を意味する」としているの、それに従って表記しています。



小学校6年生の国語の調査は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質」の4領域に分かれています。県の平均正答率と比較すると、国語は「書くこと」において県とほぼ同等で、「話すこと・聞くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質」が下回っています。「目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書く」については平均正答率が県とほぼ同等ですが、「漢字の書きとり」の正答率が低くなっています。特に正答率が低かった「調査のタイショウ」や「カンシンをもってもらいたい」という設問のカタカナ部分の書き取りは、同音異義語がほ

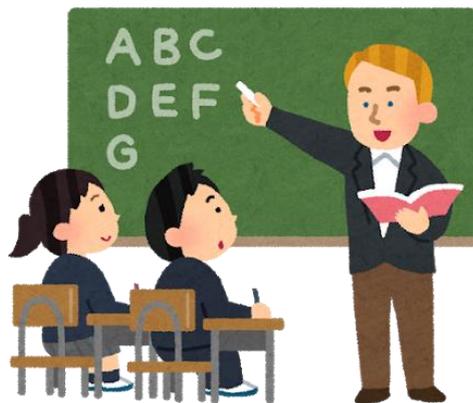
かにあり文脈に沿って正確に覚えていないと間違いやすい漢字です。また、「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読む」「話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って、自分の理解を確認するための質問をする」「話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って、自分の考えをまとめる」については平均正答率が県を下回っています。

算数の調査は「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の4領域に分かれています。「数と計算」「数量関係」は県とほぼ同等となっていますが、「量と測定」「図形」では、県の平均正答率を下回っています。

中学校3年生の国語の調査は小学校と同様に「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質」の4領域に分かれています。県の平均正答率と比較すると、すべての領域でほぼ同等です。ただ、「文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉える」「相手に分かりやすく伝わる表現について理解する」「伝えたい事柄について、根拠を明確にして書く」の3点においては、県の平均正答率をやや下回っています。

数学の調査は「数と式」「図形」「関数」「資料の活用」の4領域に分かれています。4領域すべてで県の平均正答率とほぼ同等となっています。特に「簡単な連立二元一次方程式を解く」や「グラフ上の二点の座標の差を、事象に即して解釈することができる」は、県の平均正答率の数値をやや上回っています。

英語は、学習指導要領の領域が「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4領域であり、その中で今回検査の対象となった「聞くこと」「読むこと」「書くこと」のすべてで県の平均正答率とほぼ同等となっています。「日常的な話題について、情報を正確に聞き取ることができる」や「まとまりのある英語を聞いて、必要な情報を理解することができる」では、県の平均正答率をやや上回っていますが、「まとまりのある英語を聞いて、話の概要を理解することができる」や「まとまりのある文章を読んで、話のあらすじを理解することができる」「まとまりのある文章を読んで、説明文の大切な部分を理解することができる」では県の平均正答率をやや下回っています。



小学校6年生の無回答率(設問に対して無回答の児童生徒の比率)は、国語では、すべての設問で県平均より高くなっています。特に漢字の書き取りや接続語の適切な使用についての無回答率が県平均より高く、「話し手の意図を捉えながら聞き、自分の考えをまとめる」は県の無回答率より有意に高くなっています。記述式の問題を苦手としている傾向がうかがえます。

算数では、無回答率が、ほとんどの設問で県より高くなっています。特に高いのは「示された図形の面積の求め方を解釈し、その求め方の説明を記述できる」と「示された計算の仕方を解釈し、減法の場合を基に、除法に関して成り立つ性質を記述できる」の2つの設問です。2問ともに記述式の設問になっています。

中学校3年生では、国語の無回答率は10問中2問を除いて、県よりも低くなっています。無回答率0%の設問も6問あります。記述式の問題も無回答率は県や全国と比較しても同等です。数学の無回答率の16問中11問は県よりも低くなっています。無回答率0%の設問も4問となっています。記述式の無回答率も県や全国よりも低い傾向にあります。英語では、無回答率0%が13問中10問あり、国語や数学もそうでしたが、本市の中学校3年生は最後まであきらめないで問題に向かう姿勢を多くの生徒たちがもっていることがうかがえます。

国語、算数・数学、英語では、選択式や短答式の問題に比べて記述式においては、すべての問題で無回答者がいることから、市内の小学校6年生と中学校3年生は、記述式解答に苦手傾向があることが分かります。(これは県内・全国的にも同様の傾向です)

(1) 授業では課題の解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいたと思いますか。

そう思う	小 学 校	43人	34.4%	中 学 校	36人	22.5%
どちらかといえば、そう思う		54人	43.2%		84人	52.5%
どちらかといえば、そう思わない		22人	17.6%		35人	21.9%
そう思わない		6人	4.8%		5人	3.1%
合計		125人			160人	

(2) 授業では、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思いますか。

そう思う	小 学 校	28人	22.4%	中 学 校	24人	15.0%
どちらかといえば、そう思う		52人	41.6%		80人	50.0%
どちらかといえば、そう思わない		34人	27.2%		48人	30.0%
そう思わない		11人	8.8%		8人	5.0%
合計		125人			160人	

(3) 学級の友達との話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり広げたりすることができていると思いますか。

そう思う	小 学 校	46人	36.8%	中 学 校	41人	25.6%
どちらかといえば、そう思う		51人	40.8%		78人	48.8%
どちらかといえば、そう思わない		23人	18.4%		31人	19.4%
そう思わない		5人	4.0%		10人	6.2%
合計		125人			160人	

(4) 授業で学んだことを、ほかの学習に生かしていますか。

そう思う	小 学 校	45人	36.0%	中 学 校	30人	18.8%
どちらかといえば、そう思う		54人	43.2%		92人	57.5%
どちらかといえば、そう思わない		21人	16.8%		32人	20.0%
そう思わない		5人	4.0%		6人	3.7%
合計		125人			160人	



子どもたちの授業にかかわる意識調査を見ると、「(1) 授業では課題の解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいたと思いますか」という質問については、小学校6年生では77.6%の児童が、中学校3年生では75%の生徒が肯定的に回答していました。これは県平均や全国平均とほぼ同等で、本市の子どもたちの多くが意欲的に学習に取り組む姿がうかがえます。しかし、一方で小学校及び中学校の4分の1程度の児童生徒が否定的に回答している事実からは、今後もなお「学び方」を獲得させ、学習することの面白さや楽しさを味わわせ、学習意欲の涵養を図る必要があります。また、「(2) 授業では、自分の考え

を発表する機会では、自分の考えが伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思いますか」という質問に対しては、小学校6年生では64%の児童が肯定的に回答し、その割合は県平均や全国平均とほぼ同等です。中学校3年生は同様に65%の生徒が肯定的に回答し、県平均とはほぼ

同等ですが、全国平均と比較すると、本市の生徒はかなり上回っています。自分の考えを相手に正確に分かりやすく伝えるために資料等を使い、話の論理的な筋道を意識して発表していることが分かります。さらに「(3)学級の友達との話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり広げたりすることができていると思いますか」の質問に対しては小学校6年生では77.6%の児童が、中学校3年生では74.4%の生徒が肯定的に回答しています。これはともに県平均や全国平均とほぼ同等です。「(4)授業で学んだことを、ほかの学習に生かしていますか」の質問に対しては、小学校6年生では79.2%、中学校3年生では76.3%の生徒が肯定的に回答しています。中学生は県平均や全国平均とほぼ同等です。既習事項と未習事項との関連を図ったり、教科と教科のつながりや重なり、連続性を意識したりする指導が今後も必要です。

この4問は、小中学校の現行学習指導要領及び令和2年度小学校で、3年度中学校で順次完全実施される新学習指導要領の根幹を問うものです。「課題解決のために必要な情報を集める」「目的や意図に応じて内容を整理し把握する」「理由を明確にして、論理的に分かりやすく説明する」「知っていることやできることを他に転化させて使いながら、自分の考えを広げ深め、話し合い等の共同作業を行うことで、最適解を求める」等々の力を、なお高めていくことが求められています。



## 2. 大月市の子どもたち（小学校6年生・中学校3年生）の生活状況について

### (1) 朝食を毎日食べていますか

毎日食べている	小学校	105人	84.0%	中学校	133人	83.1%
ほとんど食べている		16人	12.8%		15人	9.4%
食べない日もかなりある		4人	3.2%		5人	3.1%
食べていない		0人	0%		7人	4.4%
合計		125人			160人	

### (2) 毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか

毎日同じ時刻に寝ている	小学校	46人	36.8%	中学校	41人	25.6%
同じ時刻に寝ていることが多い		60人	48.0%		81人	50.6%
あまり同じ時刻ではない		18人	14.4%		32人	20.0%
同じ時刻ではない		1人	0.8%		6人	3.8%
合計		125人			160人	

### (3) 毎日、同じくらいの時刻に起きていますか

毎日同じ時刻に起きている	小学校	75人	60.0%	中学校	68人	42.5%
同じ時刻に起きていることが多い		42人	33.6%		84人	52.5%
あまり同じ時刻ではない		8人	6.4%		8人	5.0%
同じ時刻ではない		0人	0%		0人	0%
合計		125人			160人	

「朝食の喫食」「就寝時刻」「起床時刻」については基本的な生活習慣の中心的なところですが、市内小学校6年生と中学校3年生は、ほぼ生活リズムが確立され、良好な状況といえます。この傾向は、こ

の調査においては長年継続して、本市の子どもたちの良さであり、大きく崩れないところです。特に小学校6年生の96.8%、中学校3年生の92.5%が朝食をとっていますので、全体的に活力ある学校生活を送ることができています。朝食をとることと学力には相関関係があることが、この学力・学習状況調査で証明されてきているので、学力向上のための前提条件としてこの先も、朝食を食べる割合を高い水準で維持したいところです。就寝時刻については県や全国と同様に不規則な様子もうかがえますが、起床時刻については規則正しい生活をしている児童生徒が多いことが分かります。成長期の子どもたちですので、十分に良質な睡眠が確保されることを望んでいます。

(4) 今住んでいる地域の行事に参加していますか

参加している	小 学 校	50人	40.0%	中 学 校	41人	25.6%
どちらかといえば参加している		43人	34.4%		55人	34.4%
どちらかといえば参加していない		20人	16.0%		39人	24.4%
参加していない		12人	9.6%		25人	15.6%
合計		125人			160人	

(5) 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか

考えることがある	小 学 校	23人	18.4%	中 学 校	16人	10.0%
どちらかといえばある		45人	36.0%		36人	22.5%
あまりない		40人	32.0%		76人	47.5%
考えることがない		17人	13.6%		32人	20.0%
合計		125人			160人	

「(4)今住んでいる地域の行事に参加していますか」という質問に対しては、小学校6年生では74.4%の児童が、中学校3年生では60%の生徒が肯定的な回答をしています。これは県平均よりはやや低い数値ですが、全国平均をかなり上回っています。地域に目を向け、地域を大切に、地域から学ぶ、といった本市の「ふるさと教育」が一定程度の役割を果たしていると考えます。しかし、一方で「(5)地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」という問いには、肯定的な回答は小学校6年生で



54.4%、中学校3年生で32.5%にとどまっています。小学生は全国平均とほぼ同じ

ですが、県平均を下回っています。中学生は、全国平均を下回り、県平均をかなり下回っています。本市で行っている「ふるさと教育」の上に、本市の良さや課題を考えさせ、生まれ育った故郷を、今よりもよくするためにどうすべきか、自分には何ができるかといった視点を意識的、組織的に子どもたちにもたせていく必要があります。それは学校や家庭・地域を中心にして、子どもたちにかかわる諸団体すべてで考えるべき課題となるものです。



(6) 学校の規則を守っていますか

守っている	小学校	61人	48.8%	中学校	108人	67.5%
どちらかといえば守っている		55人	44.0%		49人	30.6%
あまり守っていない		7人	5.6%		3人	1.9%
守っていない		2人	1.6%		0人	0%
合計		125人			160人	

(7) いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか

いけない	小学校	117人	93.6%	中学校	130人	81.3%
どちらかといえばいけない		6人	4.8%		22人	13.7%
どちらかといえばそんなことはない		1人	0.8%		4人	2.5%
そんなことはない		1人	0.8%		4人	2.5%
合計		125人			160人	

公共性という側面でも、本市の子どもたちは良好な傾向を示しています。「(6)学校の規則を守っている」という小学生6年生は92.8%であり、県・全国平均と同等です。中学生3年生は98.1%であって県平均や全国平均とほぼ同等であって、本市の子どもたちが健全な学校生活を送っていることがうかがえます。また、「いじめ」への意識では、例年と同様で、望ましい傾向を示しています。「(7)いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」という問いに対して中学校3年生では県平均とほぼ同等の95%が「いけない」と回答し、小学校6年生では98.4%の児童がいけないことだと認識しています。特に、小学生の「いけない」という強い肯定の数値は県平均・全国平均を上回っています。これらのことは特筆できることで、これまでの学校・家庭・地域の意図的・計画的な指導ばかりでなく、日常のあらゆる場所であらゆる機会をとらえて、あらゆる人々が、あらゆる形で指導してきた賜物だと思います。ただ、「いじめ」を肯定している児童生徒が若干名いることは、今後もこのことの指導を丹念にきちんと、そして速やかに行うことを続けていく必要があることを示しています。



(8) 自分には、よいところがあると思いますか

ある	小学校	46人	36.8%	中学校	31人	19.4%
どちらかといえばある		54人	43.2%		81人	50.6%
あまりない		18人	14.4%		40人	25.0%
ない		7人	5.6%		7人	4.4%
合計		125人			159人	無回答1

(9) 人の役に立つ人間になりたいと思いますか

そう思う	小学校	100人	80.0%	中学校	121人	75.7%
どちらかといえばそう思う		19人	15.2%		33人	20.6%
あまりそうは思わない		5人	4.0%		5人	3.1%
そうは思わない		1人	0.8%		1人	0.6%
合計		125人			160人	

(10) 将来の夢や目標をもっていますか

もっている	小 学 校	79人	63.2%	中 学 校	69人	43.1%
どちらかといえばもっている		18人	14.4%		52人	32.5%
どちらかといえばもっていない		17人	13.6%		24人	15.0%
もっていない		11人	8.8%		15人	9.4%
合計		125人			160人	

自尊感情や自己肯定感をもつことは、自信につながり、安定した生活を送ったり学習への意欲をもつたりするためには、不可欠のことです。しかし、日本の子どもたちは、ここ数年の調査では諸外国に比べて、自尊感情があまり育っていないという結果が出ています。「(8)自分には、よいと思うところがあると思いますか」という質問に対して、本市の小学校6年生は80.0%と県平均や全国平均とほぼ同等ですが、中学校3年生は肯定的に回答している比率が70.0%で、この数値は同一集団ではないので確かな比較はできないのですが、昨年のもよりかなり低く、全国平均とはほぼ同等ではあるものの、県平均よりは低くなっています。「ある」と最も肯定的に回答した率も県平均や全国平均より低くなっています。この質問に対して否定的な回答をしている比率も県平均よりは高く、29.4%の生徒たちに自己否定の意識があることも合わせて、今年度の中学校3年生の自己肯定感の低さは大きな課題です。

また、自己肯定は、「利他」の意識にもつながっていきます。「(9)人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という質問に対しては、小学校6年生の95.2%、中学校3年生の96.3%が肯定的に回答し、小学校6年生は「そう思う」と最も肯定的に回答した率は、全国平均を上回っていて頼もしく感じます。

生きていくための目標や意欲を確かめる「(10)将来の夢や目標をもっていますか」という質問に対して、小学校6年生では77.6%が、中学校3年生では75.6%が肯定的に回答していますが、小学校6年生の数値は、県平均や全国平均より低くなっています。中学校3年生は、発達の段階を考えると値が低くなることは予想できることですが、それでも県平均とはほぼ同等であり、全国平均と比べると肯定的に回答した比率が高くなっています。本市の小学生6年生には、これからも自尊感情をより育み、さ

さまざまな場面で自信をもたせ、素直に夢や目標をもつことができ、それを応援してくれる家庭・学校・地域の安定した教育環境づくりがなお必要になっていると言えます。

これからの社会においては、個々の存在を認め合い、支え合うと同時に、周囲と良好な人間関係を構築することが求められています。これらの回答の中からすくい取れる前向きな意識を、具体的な「行動」に結びつけることができるように、日頃から「私はこう思う、こうしたい」という主体的な意識や姿勢を、なお一層培うことが大切です。



(11) 月～金曜日の1日あたりの勉強時間（塾・家庭教師を含む）

全くしない	小 学 校	2人	1.6%	中 学 校	5人	3.1%
30分より少ない		10人	8.0%		17人	10.6%
30分～1時間		44人	35.2%		42人	26.3%
1時間～2時間		36人	28.8%		45人	28.1%
2時間～3時間		23人	18.4%		29人	18.1%
3時間以上		10人	8.0%		22人	13.8%
合計		125人			160人	

(12) 月～金曜日の1日あたりの読書時間(教科書や参考書・漫画や雑誌は除く)

全くしない	小学校	18人	14.4%	中学校	41人	25.6%
10分より少ない		21人	16.8%		14人	8.8%
10分～30分		28人	22.4%		54人	33.7%
30分～1時間		36人	28.8%		29人	18.1%
1時間～2時間		11人	8.8%		14人	8.8%
2時間以上		11人	8.8%		8人	5.0%
合計		125人			160人	

(13) 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか

計画的にしている	小学校	42人	33.6%	中学校	13人	8.1%
どちらかといえば計画的		46人	36.8%		66人	41.2%
あまり計画的でない		31人	24.8%		70人	43.8%
全く計画的でない		6人	4.8%		11人	6.9%
合計		125人			160人	

(14) 読書は好きですか

好き	小学校	58人	46.4%	中学校	60人	37.5%
どちらかといえば好き		37人	29.6%		49人	30.6%
どちらかといえば好きでない		20人	16.0%		33人	20.6%
好きではない		10人	8.0%		18人	11.3%
合計		125人			160人	

(15) 新聞を読んでいますか

ほぼ毎日読んでいる	小学校	5人	4.0%	中学校	3人	1.9%
週に1から3回程度読んでいる		15人	12.0%		11人	6.9%
月に1から3回程度読んでいる		27人	21.6%		33人	20.6%
ほとんど、または全く読まない		78人	62.4%		113人	70.6%
合計		125人			160人	

月～金曜日の1日の勉強時間では、本市の小学校6年生は「30分～1時間」の勉強時間が最も多くなっていて、この比率は県や全国平均よりも高くなっています。一方、次に多い「1時間から2時間」の勉強時間の割合は、県や全国平均と比較して低く、机には向かっているが、学習する時間が短いことが読み取れます。3時間以上勉強している児童の割合は、県平均より多く全国平均よりは少なくなっています。全くしていないという割合は県や全国平均とほぼ



同等です。中学校3年生も小学生と同様、「30分～1時間」は県や全国平均より高い傾向にあり、「1時間～2時間」の勉強時間の割合は県や全国平均より低い傾向になっています。3時間以上勉強している生徒の割合は、県平均や全国平均より多くなっています。全くしていないという割合は県や全国平均とほぼ同等です。

月～金曜日の1日あたりの読書時間は、小学校6年生は、「全く読まない」や「10分より少ない」の割合は県や全国平均とほぼ同等です。30分以上読んでいる割合は、県平均とほぼ同等で、全国平均よ

りは高くなっています。中学校3年生は、30分以上読んでいる割合は県や全国平均とほぼ同等で、「全く読まない」という割合は県とは同等ですが、全国平均よりはかなり高くなっています。多忙な中学生ですが、読書習慣は一生の財産となるので、読書意欲を高め、習慣づける取組をさらに進めたいところです。なお、「読書は好きですか」という質問に肯定的に回答している割合は、小学生、中学生ともに県や全国平均とほぼ同等となっています。

「家で計画を立てて勉強していますか」という質問に対して小学校6年生は、肯定的に回答している割合(70.4%)も否定的に回答している割合(29.6%)も全国平均とはほぼ同等ですが、県平均よりは低くなっています。中学校3年生は、肯定的に回答している割合(49.3%)も否定的に回答している割合(50.7%)も県や全国平均とはほぼ同等です。ここ数年取り組まれている県及び本市の「家庭学習推進」の成果の表れがある程度見受けられますが、なお子どもたちの学力を定着させるためには、集中して机に向かう時間の長さの確保と学習の的確な方法のもとでの質の向上を図る必要があります。

また、文部科学省から、「新聞を読む頻度が高い子どもの方が、平均正答率が高い」という結果が毎年報告されています。本市の子どもたちは、新聞をほとんど、または全く読んでいない小学校6年生が62.4%でした。中学校3年生の同様の割合は70.6%で、ともに全国平均とはほぼ同等であるものの、県平均よりは高い結果となりました。新聞は、読解力、情報収集力、分析力、説明力、思考力、表現力等を培うのに格好の素材であり、今後工夫を加え、学力向上のための良い教材としていく必要があります。県教委で作成した「新聞ワークブック」などの積極的な活用も促したいところです。

### 3. 今後の取組のために

この調査は、大月市の小学校6年生と中学校3年生の生活意識や習慣、学力学習状況、学習環境等をみるためのものです。本市は調査の母数が少ないため、検査の結果はその時々々の学年の子どもたちが歩んできた歴史、作ってきた人間関係や雰囲気等の学習環境を反映しやすいところがあります。今年度の本市の



小学校6年生と中学校3年生の学力・学習状況及び生活状況において、優れているところ、課題となるところを、ここまでの記述の中でもふれてきましたが、もう一度整理します。

学力・学習状況では、中学校国語・数学・英語において県平均正答率とほぼ同等でした。また、中学校においては、国語・数学・英語の無回答率が県や全国よりも低い傾向にあり、最後まであきらめずに問題に向かう姿勢を多くの生徒がもっていることが分かりました。意欲的に学習に取り組もうとする子どもたちが多いことがうかがえます。目の前にある課題に対して、あきらめず投げ出さず、最後まで最前を尽くすことの大切さを、学校でのあらゆる機会をとらえて、それぞれの立場で指導していくことが大切です。加えて、小学校6年生では無回答率が総じて県よりも高い傾向にありましたが、こういった形式のテスト問題に不慣れで、問題を解く時間の配分を全体を見通しながら行うなどの方法を、日常のテスト問題等を使って意識して取り組ませ、身に付けさせていくことも必要です。

また、子どもたちの授業にかかわる意識調査の結果を見ると、授業の課題についての自力解決において、小中学生ともに多くの子どもたちが肯定的に回答していました。自分の考えを論理的に資料等の工夫を示しながら発表する力は、今の時代が要請している力ですが、その力を意欲的に培おうとする本市の子どもたちの状況が、特に中学校3年生に見えています。

生活状況では、「朝食の喫食」「就寝時刻」「起床時刻」という基本的な生活習慣は、ほぼ県や全国と同等で、良好な状況と言えます。地域行事への参加に対しての肯定的な回答は、全国を大きく上回っています。ここ数年本市が進めてきた「ふるさと教育」の成果の表れの一つだと感じます。また、「学校の規則を守る」割合は県や全国と同等で、しっかりとした規範意識が育っています。「いじめはどんな理由があってもいけないこと」としている割合は県とほぼ同じです。特に小学校6年生では「いけない」と強く肯定している割合が県や全国を上回っており、学校における望ましい人間関係の構築といった面で本市の児童生徒は健全であることが分かります。さらに、「人の役に立ちたいとする」項目でも肯定的な回答をする児童生徒が多く、小学校6年生は「そう思う」と最も肯定的に回答した率が全国を上回っていることから、本市の子どもたちが、人として素直に育っていることがうかがえ、たいへん喜ばしいことです。「将来の夢や目標をもつ」と回答した中学校3年生の割合も全国よりも高くなっています。本市の子どもたちの良い点を家庭でも学校でも賞揚し、さらにその「良さ」の伸長を図っていきましょう。

また、「家で計画的に勉強している」と肯定的に回答した小学校6年生は県には少し届かないものの、全国を上回っています。中学校3年生は肯定的に回答した率は県や全国と同等です。なお、本市の児童生徒の、机には向かっていても勉強時間が少ないところは課題ですが、3時間以上勉強している中学校3年生の割合は、県や全国を上回っており、ここ数年、県の施策を受け、本市で家庭学習の充実を図ってきた成果が一定程度うかがえます。市内各校では、家庭学習の充実を図るために、「家庭学習システム」を決めたり、「生活記録表」「生活記録カード」「家庭学習の手引」や「家庭学習チェックシート」を活用したり、各自が自分の能力に合わせて家庭学習を行い、学年が進行するにしたがって自主的な学習に移行できるように工夫したり、「自主学习ノート」「家庭学習ノート」に取り組ませたりしています。さらに、本市では2年前より教育活動の支援の一つとして「チャレンジ大月っ子」の取組を進めて学力の向上を図っています。夏休みには学校単位で小学校6日間、中学校5日間の「サマースクール」も開催して学力の補充をしています。今年は、都留高校との連携事業で、多くの高校生が各校のサマースクールに来て、指導に当たってくれました。各校の「家庭学習」の取組の交流を何らかの形で行うことも教育委員会で考えています。あわせて「家庭学習」だけでなく「家事労働」にも取り組むことで、「自己有用感」の醸成とともに生きた知識を学ぶことができることを企図しています。引き続き健全な子どもたちの育成のため、各家庭でも各学校の取組に御協力ください。



さて、一方で県や全国と比較して課題も見えてきました。まず、学習面での課題は次のことが挙げられます。

今回、小学校で県の平均正答率を下回った中の「伝統的な言語文化と国語の特質」に関わっては、特に漢字力を培うためには、読書のさらなる推進や新聞を読ませたり、活用させるための工夫をしたり、朝学習等で取り立てて学習したりすることが大事です。新聞をほとんど、あるいはまったく読んでいない児童の割合は、県よりも高くなっています。また、辞書を手に常に用意させ、必要な時に間髪入れず調べさ

せて定着を図ったりする指導を国語科のみならず、社会科等の他教科でも行っていくことで漢字力は向上していきます。あいまいに覚えていることの確認を、間髪入れず繰り返し面倒がらずに行うことで定着していきます。さらに、語彙を増やしたり、理解を深めたりするために、「読む」ことだけでなく、書いたり



説明したりする機会を増やすことも有効です。各学校で取り組んでいる「話し合い活動を通した学び合い」をさらに充実させ、自分の考えを説明したり文章に書いたりする力を高めることが求められています。また、国語の設問がどんな答えを要求しているかの読み取りが弱いように思います。複雑な指示を読解して正解にたどり着くための設問文の読み方や捉え方等の指導を、取り立ててすることも必要だと考えます。小学校6年生の無回答率の高さも気になるところです。目の前の課題に丹念にあきらめずに向かう姿勢を小学校の

低学年から身に付けさせていくことも必要です。

また、本市の小学校6年生と中学校3年生は、例年と同様、記述式解答に苦手傾向があります。(これは県内・全国的にも同様の傾向です)各校ともに、学習の系統性を考え、より上学年への学習内容のつながりを意識したり、子どもが主体的に考え、話し合うことを中心に据え自力解決の時間を確保したり、ペア学習や小グループでの話し合いを重視したり、課題解決学習をより多く取り入れたり等々の授業改善を行っていたり、「朝学習」として基礎的・基本的内容を繰り返し学習する(読書の時間等も含まれている)時間を設定してはいますが、その充実をなお一層図っていく必要があります。全般的に文章の読解力向上が課題となっています。新聞を活用した指導の工夫は、そのための有効な手立てとなることと思います。県教委で作成した資料等の活用も進めていきたいところです。

市内各校では、それぞれの課題を克服するための独自の取組がありますので、それも見ていただきたいと思います。各校が自ら策定した指導方法改善策に基づき、子ども一人一人を大切に、きめ細かな指導を実現しようと、努力しています。

大月市教育委員会としても、前述しましたが、今年度も夏休みを利用した学習支援(基礎学力の定着と学習意欲の向上)の場として「大月市サマースクール」を実施しました。各校において多くの子どもたちが、学力向上に向け真剣に、意欲的に学習する姿が見られました。また、おとし(平成29年度)から「大月っ子学習サロン」を平日の放課後に実施し、日頃の学習課題に対応する取組が続けられています。各校ともに軌道に乗り成果を上げています。これらの取組や、まだまだ改善の余地がある家庭学習の確立と充実に向けての取組を、各学校に引き続き働きかけて、本市の子どもたちの学力の向上を継続的に図り、学ぶ楽しさや分かる喜びを味わうことができる子どもたちを増やしていきたいと考えています。

生活状況での課題は3点あります。1点目は、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」という設問に対しての肯定的な回答が小学校6年生は全国とはほぼ同等であるものの県を下回り、中学校3年生は県・全国ともに下回っています。本市の良さや課題を考えさせ、地域に生活する主体として何ができるか、何をすべきかという視点をもたせるための指導があったかなかったか、あったとしてもそれが適切だったかそうでなかったかについて、もう一度考えてみる必要があります。「ふるさと教育」の根幹を問う部分でもあります。そして、



この問いは私たち大人の在り方も問うています。

2点目は、自尊感情を問う設問で、中学校3年生が肯定的に回答している割合が県よりも低く、否定的な回答が県より高くなっています。日頃の授業や行事等の特別活動等、学校生活の全体で、中学生の自尊感情を高める指導をさらに意識して行っていく必要があります。

3点目は、「夢や目標をもっている」小学校6年生の割合が県や全国よりも低いところです。学校や家庭・社会の様々な場で活躍の場を意図的につくり、素直に夢や目標をもつことができ、それを応援してくれる家庭・学校・地域等の教育環境作りが問われています。

大月市教育委員会では、本市の教育施策のキーワードである「ふるさと教育」「学力向上」のより具体化とその実践、各校相互の学びあいや情報の伝えあいをなお一層組織していき、各校の支援をしていきたいと考えています。これからも、本市の子どもたちのよりよい成長のために、保護者及び地域住民の皆様から忌憚のない御意見をいただき、また温かく支えてくださいますようお願い申し上げます。

